



【司会】 はい、ありがとうございます。ではちょうど時間がまいりましたので、またあとで1時間ほど質疑がございますので、何かございましたらそちらのほうでお願いします。どうもありがとうございます。では引き続きまして、お2人目の方は、小崎昌業先生であります。小崎先生はもう皆さんの中にもご承知の方も多いかと思えますけれど、東亜同文書院大学の42期生。そして昭和23年、旧制の愛知大学の法経学部の経済学科を卒業されまして、その後やはり外交官試験に通られて外務省、ルーマニアやモンゴルの大使をされました。なお現在、われわれの愛知大学東亜同文書院大学記念センターの運営委員をやっていたお1人でもあります。ではよろしく願います。

【小崎】 小崎でございます。20分という短い時間なので、要領よくお話ししたいと思いますが、まず東亜同文書院というのはどういう学校であったかということを中心に申し上げますと、1898(明治31)年に、近衛篤磨公を会長として結成された東亜同文会というのがございまして、この東亜同文会が東亜同文書院を創立したんですが、その先駆となったのは1890(明治23)年に荒尾精先生が根津一先生と共に上海に創立した日清貿易研究所でございます。1893(明治26)年6月に、日清貿易研究所の第1回卒業生89名を送り出したんですけれども、日清戦争が起こったためにこの学校は閉鎖されます。

東亜同文会は支那を保全する、支那・朝鮮の改善を助成するということを綱領にして成立し、1900(明治33)年、中国側の公認のもとに南京同文書院を創立しました。しかし義和団事件が起こったため上海に移転しまして、翌年東亜同文書院を設立してこれに合流します。

東亜同文書院は専門学校として卒業生の総数は3,219名。政治科が116名。商務科が2,995名。農工科が1科と2科と合計して60名。それから

中華学生部が途中からできまして、これも満州事変で閉鎖されましたけれども、48名。修業年限は3年制でしたが、21期生から4年制になります。大学としては1939(昭和14)年から1期生が始まり、予科が2年制、学部が3年制でありまして、入学者の総数は641名、卒業者数は433名。1943(昭和18)年から3年制の専門部が始まりまして、入学者数が418名。大学の40期生から46期生までの総数は1,492名でありましたが、1945(昭和20)年8月の敗戦によって大学は閉鎖されます。

私は大学になってから、1941(昭和16)年に同文書院に入学しました。同文書院42期生です。1900年から1945年まで学校で学んだ者の数は約5,000名に達しております。

中国保全の綱領に則って日中揖協の人材養成の基礎を固めることが、書院建学の壮大な精神でありました。同文書院の校舎は、兵火により炎上すること2回、6度の移転はいずれも上海の租界外でありました。そのうち徐家匯虹橋路校舎(1917～1937)時代が書院最盛期であり、大学開設は海格路臨時校舎(旧交通大学・1938～1945)でありました。学生は全国各府県から給費生が選抜され、部分的に私費生が選抜されました。私は滋賀県なんですけど、たまたま受けた年に滋賀県は給費生はなかったんで、その夏帰りますんで県のほうに文句を言いに行った。翌年から2人、そのさらに翌年3人と出してくれましたが、私は私費生で通さなきゃ仕方ないということでした。この給費生は、国庫および公費の補助を受けましたが返済の義務はない。就職先も自由であります。

最高学年になると中国各地を調査旅行します。これを「大旅行」と言いましたけれども、中国全土から東南アジアと700コースありました。その成果を卒業論文として提出したものが『支那経済全書』、『支那省別全誌』という、十何巻もの厚い本になりました。これは東亜同文会が出版したのです。

1922年に山東省の青島に生まれた私は、滋賀県の中学校を出て東亜同文書院大学に入りました。さっきも申しましたが書院42期、大学は3期生で、総数が172名でした。全国から集まった新入生は、まず東京九段の軍人会館に集まりまして、1941（昭和16）年4月8日から17日に上海に着くまで、東京を始め各地の見学を行ないました。東京に数日おりましたその後、伊勢、京都、大阪等で見学会、歓迎会に臨みました。途中上海に行くまでには、寮歌とか院歌を学習しまして、上海の碼頭に着いた時には出迎えの上級生が校旗を持って迎えてくれ、われわれとのあいだで行なった院歌・寮歌の大合唱が天下にこだましました。

そこからバスに乗り、国際都市上海の中心街を抜けて臨時校舎の交通大学へ。交通大学を借用する前は徐家匯の近くに理想的な書院校舎が作られ、約20年間存続しました。その間は同文書院の最盛期で、問題が少なく、順調に学校が発展した時期でありました。われわれはこの交通大学に入ったんですが、朱塗りの校門は今もあって、このあいだ私も行ってきましたけれども、昔のままの校門をくぐり抜けて中へ入ると、広い緑の芝生があります。非常に美しい芝生でした。そこで上級生と対面式をやりましたが、その美しい光景は今も忘れることができません。

その夜は府県別の県人会が催されました。洗面器に老酒を入れて、ふだんは禪なんか洗って垢だらけになってるのをちょっと洗って、紹興酒を飲めということで回し飲みをさせられた。そして同時に先輩による猛烈なクラブ活動への入部勧告があり、私もその日はラグビー部の部屋に引っ張り込まれて出られない。そうしたらたまたま滋賀県の先輩にラグビー部の人がおって、私が出てこないのを見つけて「お前はそんな小さい体じゃ無理だ」ということで勘弁してもらった。あとで私は庭球部、更にボート部、それから乗馬部に入りました。同時にその夜は寮の窓ガラスが吹き飛ば

うな寮回りがありまして、東・西・南の寮の窓ガラスが吹っ飛んでしまうというような状況でした。

翌日から同文書院独特の学生生活が始まりました。質実剛健の気風の中に根津一院長の教えが浸透して、礼儀の正しさ、先輩・後輩のあいだの親密さ、恥を知る律儀さ、好んで苦難を辞さない道義的勇氣というものが校風になっておりました。たとえば上級生は、朝夕庭で新入生に中国語を教えてくれる。「アー、アー、アー」とやってるもんだから、これを書院ガラスと言われ、今年も新しいガラスが来たなという話がわれわれの耳にも入ってきた。下級生は食堂のテーブルで端に座って上級生の飯つぎをする。これよりもうちよつと幅の広い長いテーブルでしたが、6～8人ぐらい座りまして、下級生は端に座り、飯は両側に置いてある。上級生の飯や味噌汁もついで出す、ということをやりました。そういう関係でありまして、部活動の中で生まれる親近感、教室の中だけではない教授との人間的なふれあい。教授は全員学内に住んでおられました、いつでもやって来いというので、夜でもいつでも行きますと、紅茶の中にアルコールを入れて「どうだ、濃いか薄いか」というようなことを聞かれて、酒を飲まされた。

それから中国全土にまたがる先輩・後輩の家族的な関係。大旅行、運動会、演芸会、好的（ハオダ）会というのがありました。好的会というのは同文書院独特の造語でありまして、われわれの好きなものを買ってきて食べる。運動部会でそういうものを食べる会。ふだん部屋では酒は飲まないです。部会、県人会、それから先輩訪問。上海には先輩がたくさんいましたので、われわれはふだん食べられないものをご馳走になり、よく先輩を訪ねました。話もよく聞きました。われわれの夢多き青春生活は、忘れがたい貴重なものとして育まれたということです。

また学友会には運動部と文化部が設けられ、書院生は全て入学すると学友会の会員となって、毎

日放課後は賑やかでありました。戦争の進展と共に大旅行の実施も次第に制約されましたので、私は予科2年の夏休みに単身で、華北・満蒙、蒙古方面の旅行に出かけることにしました。同文書院2期生の林出賢次郎という方が、外務省を辞めて学生監でおられました。その方をお願いして許可証をもらいました。

1942(昭和17)年6月14日から7月24日のあいだに、私は北支・蒙古を回ったんですが、回ったところだけ申し上げますと、青島、德州、石家荘、榆次、平遙、汾陽、離石、太原、大同、包頭、厚和、張家口、北京、釜山と、それだけ回りました。その中で忘れられないような話があるところどころ残っております。離石は毛沢東の根拠地の陝西省と境を接していましたが、そこで警察署長に夕飯に呼ばれて、行ったら向こうの家は屋根が平べったいんですね。そこにご馳走を置いてお酒を飲んで。月が皓々と照っております。酒を飲んでるとその辺には匪賊、まあ共産軍がいるんですよ。それが発砲する銃声を聞きながら酒を飲んだのは忘れられません。

その時には中国大陸に在外公館が37か所ありました。そのたいていのところに同文書院の出身者が勤務しておりました。その当時要職にあった先輩を拾ってみますと、若杉要、在米公使ですね。石射猪太郎、東亜局長。ブラジル大使になりました。堀内干城、中国公使で東亜局長。それから山本熊一、アメリカ局長兼東亜局長。後の外務省の次官であり、大東亜省の次官にもなった方です。錚々たる顔ぶれですね。

その当時は戦時下であり、相当危険な地帯もあったけれども、私は命の限界に挑戦するような気持ちで旅を続けました。文無しでありますので南京虫の出る木質宿に泊まって食われたり、駅で寝たり、固い椅子の列車に乗って中国人の乗客と弁当を分け合ったり、そういう旅でありましたけれども、困った時に頼りになるのは懐に入れていた同文書院の名簿1冊でした。訪ねていくという

いろいろ援助してくれますし、金が無いとまあ金も助けてくれるし、「何日でも泊まっていいよ」と。書院という世にも珍しい同窓間の絆の強さに心打たれたわけでありました。

1943年の10月に、教育に関する非常措置が決定されて、学生生徒の召集延期は廃止になり、徴兵検査が実施されました。12月1日われわれは南京の61師団に入隊しましたが、1945年8月15日に日本はポツダム宣言を受諾して終戦となります。学業半ばにして動員された私は、1946年5月に日本へ帰ってきました。翌年4月に豊橋の愛知大学に入りました。学部3年に入ったわけでございます。

ちょうど時間になりましたので。

【司会】 質問の関係もありますけど、5分は質疑時間がありますので、もしどうしてもということがあれば。

【小崎】 何かご質問があれば承りますが、私が愛知大学に入った時の状況もちよつと申し上げたいと思います。愛知大学を作られたのは同文書院最後の学長であった本間先生ですね。1946年3月に帰国されて、小岩井先生らと相談されて作られたわけですが、1946年11月15日付で創立が認められた。その時に本間先生が言っておられるのは、「東亜同文書院を背景に持っていたからこそあれだけの愛知大学ができた」と。それは事実だと思います。あの混乱の最中で、私も豊橋を知ってますが全部焼けておりました。その中で大学を作るといことは、日本では愛知大学1校だけだったんですね、その時できたのは。認めてもらったのはもちろん文部大臣と本間先生の交遊関係も有ったんでしょうけれども、非常に例外的な、「同文書院を背景に持ってたから愛知大学ができた」と本間先生は言っておられます。そしてそこでは新日本の担い手として民主主義に基づいて、世界平和と地域社会の発展に貢献する教養ある人達を育成するというを目的に、大学設立趣意

書が作られたのです。初代学長は林毅陸ですが2代目・4代目は本間学長、3代目は小岩井学長でした。初めはお金が無いもんですからわずか100万円の基金。これは全部寄付金で賄ったと。この豊橋市の非常なご援助によってできた学校でありまして、1946年12月に予科の全学年の編入試験、それから翌1947年4月に学部の編入試験がありました。その4月期に私はここで試験を受けたわけです。

合格者の出身校は、同文書院が39%。他は海外・内地合わせて80校から多数の学生が集まった。当時の校舎は、私今日見て回りましたけれども、昔の寮はありませんでした。窓ガラスは全部割れ、壁も至るところ崩れてるような状況でした。そこで急遽整備作業が行なわれて、1947年1月には寮生350名が収容できる寮が完成しました。私は法経学部に入りましたけれども、開学直後に予科1～3年、学部1～3年を持った旧制大学がここに成立したわけです。悪性のインフレと食料難が続いて、学生にとって厳しい毎日でした。しかしそういう中で学生は熱心に講義を受け、よく本を読み、日本の将来について真剣に議論をしました。この頃全学的な自治会が成立しました。1947年の末に全国有力私学の自治会、私学連が愛大で結成されます。その前年に結成された官学連に続くもので、1948年9月には私学と官学が合わさって全学連ができる。最近はある聞きませんが、ひと頃暴れましたね。あの全日本学生自治会総連合、全学連を作ったわけです。

ここまでで終わります。

【司会】 はい。どうもありがとうございました。時間が短くて貴重なお話が充分聞けないという点では本当にもったいなく思いますけど。どうしてもという方お1人おられますか。よろしいでしょうか。じゃあまた後半のほうで、ございましたらお願いいたします。先生どうもありがとうございました。引き続きまして3番目の先生ですね。奥

田先生であります。先生は朝鮮の京城にございました京城経済専門学校のご出身で、愛大27年卒という方でございます。愛大の法経学部経済学科を卒業されたあと、日本製鋼所に入られました。その後山歩きとかいろいろな生涯教育的な世界にずいぶん入られまして、そちらのほうのご著書もたくさん出されてるということです。では奥田先生、お願いいたします。

【奥田】 皆さんこんにちは。ただいまご紹介いただきました、京城高商におりました奥田でございます。今日はこんな高いところからお話させていただくようになります、大変恐縮いたしております。本日のシンポジウムは、東京支部の高井和伸さんを中心として、関東4支部の役員の方々企画立案されたものと伺っております。その趣旨は大変ご立派で、私共よりずっと後輩の方々がこのように愛知大学の生い立ちというか、ルーツを大切に思っていてくださることに対し、深く敬意を表したいと思っております。実は私事で恐縮ですが、最近ちょっと体調を崩しております、ここで話することを1度はお断りしたんですが、高井様のたつてのご要望で、その気迫と情熱にほだされましてお引き受けすることにいたしました次第でございます。今日のパネリストは海外からの引き揚げ学生ということで、海外各地、各校から選ばれたわけですが、朝鮮からの引き揚げ者で、愛知大学に入学した人は、私の知る限りでは四方先生の息子さんと城大予科におりました四方農君、京城高商で私と机を並べておりました前田耕造君、京城高工（これは高等工業ですけれども）から鈴木秀信君、それと私の4人ですが、四方君と前田君はもうすでに他界され、鈴木君は音信不明ですので、結局京城組で残ってるのは私だけということになったようです。正に余人を以て代え難しということで、どなたか適当な方にとお願いしたんですが、京組が1人も出ないというのは誠に残念だし、私が1人残っていたものですから、